

MACF礼拝説教要旨

2020.05.24

ローマの信徒への手紙3章

3:9 では、どうなのか。わたしたちには優れた点があるのでしょうか。全くありません。既に指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も皆、罪の下にあるのです。

3:10 次のように書いてあるとおりです。「正しい者はいない。一人もいない。

3:11 悟る者もなく、神を探し求める者もいない。

3:12 皆迷い、だれもかれも役に立たない者となった。善を行う者はいない。ただの一人もいない。

3:13 彼らののどは開いた墓のようであり、彼らは舌で人を欺き、その唇には蝮の毒がある。

3:14 口は、呪いと苦味で満ち、

3:15 足は血を流すのに速く、

3:16 その道には破壊と悲惨がある。

3:17 彼らは平和の道を知らない。

3:18 彼らの目には神への畏れがない。」

3:19 さて、わたしたちが知っているように、すべて律法の言うところは、律法の下にいる人々に向けられています。それは、すべての人の口がふさがれて、全世界が神の裁きに服するようになるためなのです。

3:20 なぜなら、律法を実行することによっては、だれ一人神の前で義とされないからです。律法によっては、罪の自覚しか生じないのです。

+++++

「すべての人が罪の下にいる」と語ったパウロはより具体的に聖書のあちこちを引用してその具体的な姿を表現しています。

3:13 彼らののどは開いた墓のようであり、彼らは舌で人を欺き、その唇には蝮の毒がある。3:14 口は、呪いと苦味で満ち、3:15 足は血を流すのに速く、3:16 その道には破壊と悲惨がある。3:17 彼らは平和の道を知らない。3:18 彼らの目には神への畏れがない。」

と続きます。

「のど」「舌」「唇」「口」「足」「道・生き方」「目」  
などが神様の望む内容を実行できていない深刻な問題を起こし続けていることをパウロは語ります。

大きく分ければ「言葉」「行動」「意識」が的外れになっているということなのです。特に、その根源的な問題は何かといえば「3:18 彼らの目には神への恐れがない」という言葉の中にヒントがあります。

神への恐れ・神を礼拝し、尊敬する心についての「気づき」もなければ「必要性」も感じないという生き方の中に平然と生きている人間の姿、それは自分を神と等しい存在として生きている姿であり、箴言には「1:7 主を畏れることは知恵の初め。無知な者は知恵をも諭しをも侮る。」とありますので、知恵のない、無知な人間たちが、好き勝手に生きて、地球の他の生き物も、人間の本来あるべき社会的な共同体意識も壊してしまっているのです。

これは実に深刻です。

神によって、いのちを吹き込まれ、生かされた存在としての人間の姿を忘れ、自らを神のように「裁き、断罪し、さまざまな結論を簡単に口にしながら平和を作ることができないまま生きている人間」それが、パウロが見ている神を神として礼拝しない人たちの社会なのです。

彼らは神の律法を知っていますが、それを守れていません。神の律法を知らない人たちはなおのこと、自分勝手な基準の中で神の望まない方向に進んでいます。

そこで結論としては「それぞれの心の中に罪責感が生まれ、自分を責める心が育っていきます。

しかし、人間というのは面白い存在で「自責の念」がそだっているのに、手にはいろいろな機材を持っているし、技術の進歩で便利に生きていることもあって「仮想的万能感」に酔う傾向があるのです。「ま、しょうがないよ。大丈夫だよ」と自分に言い聞かせながら自分の心と向き合おうとしないのです。

「神に対する恐れがない」ことが原因で「自分を客観的に見る」ことがなかなかできません。比較の対象が自分か他の人間しかないので、尊大になり、あるいは劣等感を持ち、自分をしっかりみようとできないのです。

でも、誰の心にも、いくらかの「罪責感」「呵責」「咎め」「不安」「恐れ」は存在します。それがどこからくるのか、わからないことが多いですが、「神に対する恐れ」に気付けると、素直に「問題の原因や自分自身の不安定さの原因」がわかるようになってきます。

神を神と認め、礼拝する心を持てるようになってくると、私は「神の心とずれていた」「神の心に反抗していた」「自分中心で神など無視していた」ということに気付けるようになります。そして同時に問題解決への道も見えてきます。

パウロは今までの章のなかでいつも、問題としてきた共通の話題があります。

それは「神に対する恐れがない」

1:21 なぜなら、神を知りながら、神としてあがめることも感謝することもせず、かえって、むなしい思いにふけり、心が鈍く暗くなったからです。

「神に対する畏れがない」

1:28 彼らは神を認めようとしなかったので、神は彼らが無価値な思いに渡され、そのため、彼らはしてはならないことをするようになりました。

1:29 あらゆる不義、悪、むさぼり、悪意に満ち、ねたみ、殺意、不和、欺き、邪念にあふれ、陰口を言い、

1:30 人をそしり、神を憎み、人を侮り、高慢であり、大言を吐き、悪事をたくらみ、親に逆らい、

1:31 無知、不誠実、無情、無慈悲です。

1:32 彼らは、このようなことを行う者が死に値するという神の定めを知っていながら、自分でそれを行うだけではなく、他人の同じ行為をも是認しています。

「神に対する畏れがない」

2:17 ところで、あなたはユダヤ人と名乗り、律法に頼り、神を誇りとし、

2:18 その御心を知り、律法によって教えられて何をなすべきかをわきまえています。

2:19-20 また、律法の中に、知識と真理が具体的に示されていると考え、盲人の案内者、闇の中にいる者の光、無知な者の導き手、未熟な者の教師であると自負しています。

:

2:21 それならば、あなたは他人には教えながら、自分には教えないのですか。「盗むな」と説きながら、盗むのですか。

「神に対する畏れがない」

究極的な問題である「死」についても「神に対する畏れがない」というところからすべての人間にもたらされてしまった深刻な結末です。

死の多くは「悲劇」です。神がいるなら、どうしてこんなことが起こるのだ。と叫びたくなります。

聖書はその最初の出来事をこう説明しています。

2:15 主なる神は人を連れて来て、エデンの園に住ませ、人がそこを耕し、守るようにされた。

2:16 主なる神は人に命じて言われた。「園のすべての木から取って食べなさい。

2:17 ただし、善悪の知識の木からは、決して食べてはならない。食べると必ず死んでしまう。」

3:1 主なる神が造られた野の生き物のうちで、最も賢いのは蛇であった。蛇は女に言った。「園のどの木からも食べてはいけない、などと神は言われたのか。」

3:2 女は蛇に答えた。「わたしたちは園の木の果実を食べてもよいのです。」

3:3 でも、園の中央に生えている木の果実だけは、食べてはいけない、触れてもいけない、死んではいけないから、と神様はおっしゃいました。」

3:4 蛇は女に言った。「決して死ぬことはない。」

3:5 それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」

3:6 女が見ると、その木はいかにもおいしそうで、目を引き付け、賢くなるように唆していた。女は実を取って食べ、一緒にいた男にも渡したので、彼も食べた。

3:7 二人の目は開け、自分たちが裸であることを知り、二人はいちじくの葉をつづり合わせ、腰を覆うものとした。

3:8 その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、

3:9 主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」

3:10 彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」

アダムには恐怖心はありましたが、礼拝の対象としての愛、畏敬の念はここには見えません。

「死」が入り込みました。これについてはまた別の章にも書かれているのでそこで学びますが、亡くなった個人に対して神が何か悪いことをもたらしたということではなく、すべての人間が「罪の下にあり、罪の支払う報酬である死」の下に置かれているのです。その出発点は「神に対する畏れがない」という最初の人、人間の総代としてのアダムの罪から始まりました。悲劇はそこから連綿と続いているのです。

「神に対する畏れがない」ということの人間の歴史にもたらした、深刻な諸問題、そして、その心から生まれる絶望、不安、そして自己憐憫や仮想的万能感。

神は、そういう私たちに恵みをお与えになりました。

神を礼拝しながら生きるということの素晴らしさや神に愛されていることの嬉しさを理解できる心をお与えになり、救い主の存在に気づかせてくださいました。

しかし、今日、「死」を他人事のように生きていませんか  
今日、神への畏れはありますか、礼拝を楽しんでおられますか。  
感謝、祈りが日常的に言葉として、態度としてでできますか

「神を神として尊敬し、礼拝し、感謝しながら生きていますか」  
この質問に嬉々として応えることができたとき、私たちには希望が見えてきます。  
「神を喜ぶ」という心こそ、私たちの中に深く、根付くべき資質なのです。